

「お茶の水地理」50号によせて

## 「お茶の水地理談話会」から発展して

式 正英

「お茶の水地理」第15号（1974年）のNEWS欄に「地理学教室の主宰するお茶の水地理談話会が（1973年）6月に発足した」とする記事がある。更に「奇数月の第3土曜日午後を開催日とし、本年度の世話人は浅井、式、斉藤の3教官が当る。1973年に3回開催され、予期以上に出席者が多く、健全な発展を期待したい」と貝山久子助手によって書かれている。第1回は1973年7月21日、筆者がスピーカーとなり「ミュンヘン、ウプサラとその周辺の地理」について話した。その3ヶ月前、自身が満1年の長期在外研究から帰国し、外国で得た知識や情報を余りに多量多彩と感じていたので、なるべく早くにその一部でもお知らせしたい気持ちが溢れていた。

実は1960年代後半から教室の若手教官の間で研究会又は読書会のような集会を持ちたいとする空気があって、実際にも内輪な小規模な会が数回不定期に試みられた。併し当時の教授の方々には結果的に参加して貰えず、長続きもしなかったが、全く消えたつもりも無かった。そうした中で筆者の帰国後のハイポテンシャルな状況がきっかけとなり、上記の様に談話会が立ち上がった。その時は教官だけでなく卒業生にも呼びかけ広く話を聞いてもらうことになった。

アナウンスがどの位徹底したかは明らかではないが、初回の参加者は40名に及んだ。佐藤由子（3回生）氏が2人のお子様連れで聞きに来られた事が珍しく、今も記憶している。小会議用の702室（後に一時期井内教授室）を会場にした為、聴衆が溢れてしまい、自然に熱気に包まれて印象的な雰囲気となった。第2回は栗原尚子（16回

生）氏が「メキシコにおける都市化」（9月22日）、第3回は浅井辰郎教授が「発生論的手法によるアイスランドの地誌」を夫々話された。いずれの話題も外国での新しく体験した調査研究を報告するもので、新鮮且つ内容の濃いものであった。談話会発足の初年度はかくて順調に事が運び、教官側からも卒業生からも参加者が万遍なくあって、誰もが長続きすることを期待した。この談話会が10年を経て、お茶の水地理学会に発展したのは好ましい方向に思う。

教室年報の側面を持つ教室の機関誌「お茶の水地理」は当時の教室主任渡辺光教授の発意により1959年5月に創刊され、この度第50号の刊行を迎えた。初めの編集委員は教育的意味を込めて学生のみ、後に教官が加わり、更に卒業生も加わった。現在はまた別の構成になったと聞かすが、大学や社会の変化に対応しての姿勢と受け取れる。「学会」と名付けたからと言って、お茶大地理の教室員と同窓生に成員が限定された組織であり、その成員の為に在る。年若い会員が公的学会にデビューする前に演練したり、主婦会員が社会復帰に向けて働き取り戻すべく利用したりする場に活かされれば、本学会の存在意義は大きいと思う。教員によるサポートも必要であるが、むしろ学生や卒業生によって積極的に本学会が活用され、プラス思考の中で女子大学ならではの成立し得ない様な存在であって欲しい。

---

しき・まさひで  
本学名誉教授

